

藤代紫水をインターハイ優勝に導く。ひたむきな指導は恩師への恩返し。その姿を見て育ち、キャプテンを務めるご子息は、いま父と同じ道を歩む。

茨城県で勤務した高校をいずれもハンドボールの強豪に育てあげた滝川監督。さぞかし厳しい雰囲気想像していたが、あくまで口調は柔和で穏やかだ。ご子息の写真を見せてくださった時は、はにかみながら笑顔がこぼれた。自分を慕ってくれた生徒のために全力で指導する。教え子の活躍に目を細める。その意思を受け継ぎ、県内で指導にあたっているOBも多いという。お話を聞いて感じるのは、厳しいなかにも愛情あふれる指導ぶり。その原点には恩師である松井幸嗣先生の教えがある。

常勝監督を支える母校、恩師

私のハンドボール人生は、日体大と恩師である松井幸嗣先生(体育学部教授、ハンドボール部部長・男子監督、日本男子代表元監督)の存在を抜きにして語ることはできません。

私がハンドボールを始めたのは、中学1年生の夏でした。その後、中学3年生の時にロサンゼルス五輪(1984年)が開催され、そこで日本代表選手であった松井先生の活躍を目にします。とにかくすごい選手だと憧れました。

高校時代は、インターハイ出場は叶いませんでしたが、高校3年生の時に県代表に選ばれ、キャプテンを務めました。ちょうどその頃に、松井先生が日体大の監督に就任されたのです。日体大OBであった県選抜の監督に「日体大に行って続けたいか?」と聞かれ、「ぜひお願いします」と答えたことで、大げさにいえばその後の私の人生が決まりました。

日体大に入學して合宿所生活が始まると、当然のことながら、練習は厳しく、食事当番や雑用に追われる日々。もちろん、二軍からのスタートです。1年生の夏から合宿に参加できるようになりましたが、なんと合宿後の東日本インカレで、1年生のなかでたった一人居残りをするに。いまにしているのを奮起して、2年生の夏には韓国遠征に参加。3年生以降、たびたび試合に出場させてもらえるようになりました。

私が高校生だったころ、茨城県で一位になっても、東京都3位の日体荏原高校にダブルスコアで負けてしまうような状況でした。私は、日体大卒業後、鬼怒中学校、県立伊奈高校、県立藤代紫水高校と勤務してきました。監督を務めた両高校ともインターハイや全国選抜などで成績を残してきましたが、多くの方々と出会い松井先生の教えがあったからこそだと思います。

最初に常勤講師として1年間勤務した鬼怒中学校では、校長先生がたまたま私の小学校時代の担任で、ハンドボールを指導してほしいと声をかけてくださいました。そこで県中学校総体で優勝し、翌年、正教員に採用され伊奈高校に着任すると、中学時代の教え子も入學してくるようになりました。こうして指導の流れができたことも功を奏したと思います。先生方のハンドボールへの関心も高まり、いい選手がいたら私のところに送るよと言っていたこともありました。

伊奈高校で結果を残すことができたが、藤代紫水高校に赴任した当初はハンドボール専用のコートがありませんでした。すると、「お前が来てくれたのにこの環境ではもったいない」と、同校の日体大陸上部出身の先生が学校に掛け合ってくれました。ここでも日体大の力を感じることができました。はじめのうちは、5時過ぎまで藤代紫水高校の練習をみて、それから伊奈高校に駆け付け、残してきた生徒を指導していました。私の転勤で生徒に迷惑をかけてしまうことが心苦しかったのです。インターハイ予選で藤代紫水高校と伊奈高校の対戦になった時は、指導者として本当に辛い思いをしました。

これまで指導にあたってきたなかで、勝てない時期が続く等、決して順風といえない時期もありました。そんな時、ドイツに留学されていた松井先生からお手紙をいただきました。「君のチームのハンドボールってなんだ?」と問われ、答えることができませんでした。「日体大なら、ディフェンスから速攻。柱をしっかり立てて、枝葉はその時の選手

活躍する OB INTERVIEW

茨城県立藤代紫水高等学校
教諭 ハンドボール部監督

滝川 一徳氏



滝川 一徳(たきがわ かずのり) / 1992年、体育学部卒業。現在、茨城県立藤代紫水高校体育教諭、ハンドボール部監督、生徒指導部長。前任の県立伊奈高校ではインターハイ全国優勝3回。藤代紫水高校においても全国選抜、国体などに連続出場を果たし、強豪校に育て上げた。今年、ご子息の潤君がキャプテンを務めるチームを率い、悲願のインターハイ全国優勝を達成する。そのほかU19日本代表監督(2008~13)、U21日本代表監督(2006)・コーチ(2002~5、2014)を歴任。2013年、世界ユース選手権に28年ぶりに出場。今年はリオ五輪予選に日本代表コーチとして出場した。

に合わせてつくるんだ」と書かれており、いろいろなチームの練習や戦法に影響を受けて、私のなかに迷いが生じていたことを気づかせていただきました。いまでは、自分の原点に返る意味でも、全国選抜やインターハイの前に生徒を日体大に連れて行くことが習慣のようになっています。

親子二代で恩師のお世話に

今年の特徴は、決して強くないが負けないチームです。派手な点の取り方はしませんが、基本に忠実に堅実な試合をします。

伊奈高校ではインターハイの決勝に3回出場していずれも優勝。藤代紫水高校では3回とも2位。今回の優勝は格別な思いがあります。

実は、藤代紫水高校に着任して初めてのインターハイ決勝で、息子が見に来てくれた目の前で敗れてしまいました。夏休みもハンドボールでほとんど家をあけて、どこにも連れていくことができず寂しい思いばかりさせていました。夏休みの思い出という

作文で、息子に作り話を書かれたことさえありました。周りの友達を意識したのか、本当はどこにも連れて行っていないのに、夏休みに私と遊びに行ったり架空の思い出を書いたのです。授業参観でそれを目にした時、廊下で涙しました。そして、そんな息子から感謝の手紙をもらいました。家族に申し訳ないと思う一方で、強く勇気づけてくれる手紙で

がむしゃらに練習していた高校時代とは違い、松井先生から教わることはすべてが新鮮でした。先生は、練習にはストーリーがあるとおっしゃって、目的や理由を具体的に説明してくださいました。ただ、「鬼」と恐れたこともありましたが笑。

日体大時代は、2年生から4年生までインターカレ三連覇。3、4年生の時は私も出場しました。なかでも4年生での優勝は、決勝トーナメント前のリーグ戦で黒星がついてからの優勝というとても苦しい戦いでした。優勝した夜、私と友人は、恐る恐る遠征先の函館のホテルの温泉に松井先生を誘いました。その時のことはいまでもはっきり覚えています。私は決して上手い選手ではありませんでした。そのため人より練習しないといけないと思い、先生に分らないように、いつも夜遅くまで残って練習をしていました。風呂のなかで、先生から今後の進路について聞かれ「地元で先生になります」と答えました。すると、「教員になるんだったら、お前のように、影で努力している選手を認められる人にならないとだめだぞ」とおっしゃってください、それを聞いて涙が止まりませんでした。松井先生はずっと見ていてくださったのです。

三連覇で金メダルを3つ手にした6人は、いずれも高校3年生でのインターハイ出場経験がありません。いまは日体大にすごい選手が入ってくると思いますが、当時、松井先生は私たちのような選手を鍛えて、三連覇に導いてくださったのです。

私の宝物として大切にしています。この手紙を書いたのが今年のチームのキャプテンで私の息子です。まさに、勝利の神様が今年のために優勝をとおいてくれたのではないかとさえ思います。

息子は中学生の時に、私の母の病床で、松井先生とお会いしたことがあります。余命いくばくもない母に松井先生は「お孫さんの試合の応援にいかなきやだめでしょ」と涙を流して励ましてくださいました。息子が高校3年生になって、あらためて進路はどうするか尋ねると、「日体大に行きたい、松井先生に教わりたい」と言いました。親子二代で先生のお世話になるのは、おそらく私が初めてではないかと思っています。

藤代紫水高校から日体大に進んだ教え子のうち、小室大地選手、信太弘樹選手、木村昌文選手、元木博紀選手の4人がリオデジャネイロ五輪予選の日本男子代表に選ばれました。また、教員として7名ほどが活躍していると思います。2019年には茨城県で国体が開かれる予定です。選手を育て、やがてはトップアスリートや指導者となり、県内に人材の輪が広がっていくことが私の願いです。

私は松井先生の言葉をお借りして、「人との出会いを大切に」「感謝の気持ちをお忘れずに」「苦しい時こそがんばれ」と色紙に書いて卒業生に渡しています。皆さんもこれらのことを心がけ前向きに物事に取り組めば、必ず道は拓けるはずです。



リオデジャネイロオリンピック男子アジア予選での藤代紫水高校から日体大へ進んだ4選手
(右から 元木 博紀、信太 弘樹、滝川先生、木村 昌文、小室 大地)